

星辰の墓守

(夏目漱石「夢十夜」第一夜より)

三井
隆

人
物

男
(35)

女
(31)

○日本家屋・和室（夜）

裸電球が灯る十畳ほどの座敷。開けた障子の先に縁側と庭が見える。

浴衣を着た長い髪の女（31）が布団に仰向けに寝ている。

同じく浴衣を着た男（35）、その枕元で腕組みをして座っている。

女「……もう、長くはないわ、私」

男、女の顔を覗き込む。色白で清楚な

細面。

男「そう……なのか」

女「ええ……死にますとも」

女の瞳に映る男の顔。

男、女の耳元で囁く。

男「まだだろう。まだ死ぬなんて……」

女「決まったことですもの、仕方ないわ」

男の瞳に映る女の顔が微笑する。

男、顔を上げ、また腕組みをする。

女「私が死んだら……」

男「分かっている」

女「真珠貝で穴を掘って……」

男「ああ、埋めるよ」

女「星の破片を……墓標の代わりに」

男「ああ、置けばいいのだろう」

男、辛そうに顔を背ける。

女「きつと、逢いに来ますから」

男「それは、いつ……」

女「おそらく……百年」

男「百年……」

女「待っていられますか」

男、女に顔を寄せて頷く。

女の瞳に映る男の姿が、波打つように

滲む。

女の頬に涙が伝う。

目を閉じ、動かなくなった女を見つめ

る男。

○日本家屋・庭（夜）

庭木や草花が生えている、ごく普通の

一般家庭の庭。

男、洗面器ほどの大きさの貝殻で、穴を掘っている。月光を反射して煌めく真珠貝の貝殻。

× × ×

墓穴に女が横たわっている。

座って見降ろしていた男、貝殻で土をすくって静かにかけていく。

女の遺骸が徐々に土に埋もれていく。

× × ×

庭に小さな土饅頭が出来ている。

男、一抱えもある丸い石を抱いて運んでくる。

男が石を土饅頭の上に置くと、石と接していた胸と手の部分が微かに光る。

男、土饅頭の傍らに腰掛ける。

女の声「百年、待っていてください」

男、上空を振り仰ぐ。

満天の星空。

○（回想）惑星開拓基地・宇宙港（夜）

星空に向かって、輸送船が次々に出発していく。

男のN「新天地を目指してやって来た移民船団であつたが、わずか数年で開拓途上の惑星を放棄し、地球に帰還することとなった」

○（回想）同・展望室内（夜）

宇宙港を望む、大きな展望窓がある。

開拓団の制服を着た女、発進していく

輸送船団を険しい表情で見ている。

同様の制服を来た男、女の背後から近

づいていく。

男「やはりここだったか」

女、驚いて振り返る。

女「あなた、戻らなかったの？」

男「上層部の決定は間違っている。コストを最優先させて計画を白紙に戻すなんて」

女、窓の外を指し、

女「あれが最後の船団なのでしょう。急げばまだ間に合う。早く行って」

男「必ず宇宙移民の道を開く。お父さんの代からの君の悲願じゃなかったのか」

女「でも、あなたまで……私に付き合う必要なんて……これまで十分、助手として尽くしてくれた。それでもう……」

男「助手としての勤めとか、義務感なんかじゃない。僕の心は、ずっと君と共にある」

女「ああ……」

男、縋りつく女を静かに抱き留める。

○日本家屋・庭（朝）

男、陽光の下、墓の傍に座っている。

男のN「私は彼女と二人だけでここに残り、研究を続けた。惑星改造を成し遂げ、新世界のアダムとイブになる。私はそんな甘い夢想をしていた……」

○（回想）惑星開拓基地・研究室

実験装置や制御盤が並ぶ室内。

男と女、それぞれモニターを凝視して

いる。

女、髪の毛を掻きむしる。

女「だめだわ、何度やっても窒素の発生量が足りない。そつちのシミュレーションは？」

男、首を横に振る。

男のN「研究は行き詰った。宇宙移民はやはり無謀な夢物語だったのだろうか」

虚空を見つめ、微笑する女の虚ろな目。

男のN「そんな時だ。彼女は研究の方向性を変更することを提案して来たのである」

○日本家屋・庭（夕）

男、夕焼け空の下、墓の傍に座っている。

女の遺骸が眠る土饅頭と墓標。

女の声「私たち、今まで惑星を改造することを考えてきたでしょう。それが無理なら、私たちが変わればいいじゃない」

○（イメージ）モニター画面

ノイズがチラつく粗い映像。

複数のチューブが繋がった女の全身の
シルエット。薬液が身体に送り込まれ
ている様子。

× × ×

DNAの鎖状の遺伝子モデル。鎖が一旦
ほどけて組変わっていく。

○宇宙空間

自転する惑星。その惑星が自転しながら
恒星の周囲を公転する。

男のN「僕の心はずっと君と共にある。何が
あろうと、その気持ちに変わりはない。し
かしながら、君が言うその変化に、実際は
どれだけの時間を要するのだろうか……」

○日本家屋・庭（夜）

男、星空の下、墓の傍に座っている。

頭髮や髭がかなり伸びている。

男の背後の日本家屋に、電子的なノイ

ズが走ったかと思うと、画像が切れるように消えてしまう（日本家屋は立体映像だった）。

男のN「ああ、スイッチを切るのをすっかり忘れていた。未知の変化に臨む我々が、少しでも心安らかに居られるように……そのための映像など、とつくに必要なくなっていたのに」

○異星の荒れ地（夜）

後に現れたのは、簡素なテントのような実験ユニット。

後は岩場と砂地、風変わりな植物が散在する荒漠たる異星の大地である。

男の胸元に、蕾をつけた植物の茎が伸びてきている。元を辿るとそれは墓標の石の下から出てきている。

蕾を見つめる男。

やがて蕾がゆっくりと開き、真っ白な百合の花が開く。

男、顔を百合の花に寄せる。

男の唇が百合の花に触れる。

涙を流す男。

男のN「そうか、百年はもう来ていたんだ」

男の足は木の根と化し、下半身は樹木
になっている。

(了)